

ツバキ属植物の系統関係の再検討

【代表者】

植松千代美 大阪市立大学 理学研究科 准教授

【共同研究者】

岡崎純子 大阪教育大学 教育学部 准教授

【研究概要（申請書より抜粋）】

ツバキ属植物は東アジアから東南アジアに 4 亜種 20 節 300 種以上が知られている（桐野 2013、Hakoda 2008）が、形態形質に基づく分類体系（Chang & Bartholomew 1984）と、分子マーカーによる系統樹（Vijayan ら 2009 など）の間に齟齬があり、ツバキ属全体の系統関係の解明が待たれている。申請者らがこれまでに試みた核の SSR マーカーや、葉緑体 (cp)DNA の *matK* 遺伝子の配列はツバキ属の系統関係解明に適さなかった。一方 cpDNA の構造変異の出現頻度は節や亜属で大きく異なり、高次の系統関係解明に有効と考えられた。また倍数体の存在が系統関係の解明を困難にしているが、フローサイトメトリーの結果、ツバキ属には 2 倍体の他に半数体、4、6、8 倍体があり、限られた節において高い頻度で倍数体が出現していた。そこで本課題では新たな cpDNA の構造変異を探索しツバキ属の高次の系統関係を跡づけるとともに、cpDNA は構造変異をマーカーとして倍数性種の母系推定を試みる。また染色体観察により染色体数の確定と核型分析を試みる。これらの結果を総合して、ツバキ属の系統関係の再検討を試みる。